



シリーズ

発達に違いのある子どもたち

『子どもの気持ちを読み取る手助け』 「感覚統合」という視点（後編）

市では「障がいのある人、ない人にかかわらず、だれもがいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念にさまざまな施策に取り組んでいます。今回も、市内で子どもの発達支援に取り組まれているNPO法人「まいすてつぷ」から、発達に違いのある子どもたちについて正しく理解いただくために、文章を寄稿していただきました。

11月号「感覚統合とは」、1月号「感覚防衛反応を持つ子どもの様子」に続き、今回は「感覚防衛反応（以下「感覚過敏」）に苦しむ子どもへの対応」について説明したいと思います。

感覚過敏に苦しむ子どもの実態

まいすてつぷを利用している中学生の男の子M君が言いました。

「学校の休み時間、テストが終わったばかりだったので、教室の中はザワザワと騒がしかった。その時先生が前の方で、何か大声で言っていた。近くでおしゃべりしている子が沢山いたので、僕にはその内容を聞き取ることができなかった。何を言ったのか先生に確認しようとも思っただけ、怒られるのは嫌だったのでやめた。数日後、提出物を出していないと先生に呼び出され怒られ

た。その時初めて、あの時先生は課題の提出の仕方と提出日を言っていたんだとわかった。あまりに頭ごなしに怒られたので、涙がこぼれそうになった。」

M君は、日頃から聴覚過敏に悩まされていますが、周囲の人からは何かに苦しんでいるようには見えません。中学生にもなると、できるだけそう見えないように必死で隠してしまおうのです。彼の聴覚は周囲のさまざまな音や声に敏感に反応してしまい、本当に注意を向けなければならぬ音や声を拾うことができませぬ。

通常、人の脳は、先生の声のように注意を向けなければならぬ音に對し、あまり意識しなくても脳の中のイコライザーを調整し、その声を受け取る神経を増強させることができます。ゆえに騒がしい中でも聞き

とり、反応することができるとは（カクテルパーティー効果）。聴覚過敏の子どもの脳は、もともと働き方の違いがあるためにそれができないので、学校のような集団の中では合理的配慮が必要になります。

感覚過敏を持つ子どもへの対応

M君には、このように聞き取れない場面は沢山あり、周囲の友達に聞くこともできるけど、あまりにしょっちゅうだとやはり気が引けます。まずは学校の先生方の理解を得て、先生へのヘルプが出しやすい環境にすることが大切です。そして、そのような子どもが存在する教室では、大切なことは板書や掲示物にして、できるだけ視覚的に残す必要があります。

聴覚過敏の子どものは、音が多すぎたり、大音量だったり、苦手な音だったりすると、苦痛で不安になり何にもできなくなることがあります。そのような時、イヤーマフ（音を小さく柔らかくするヘッドフォンのようなもの）をすることがありますが、先生の指示の声も周囲の音と同じように小さくなります。

環境騒音のみを消し、人の音声は通常通り聞こえる「ノイズキャンセリングイヤフォン」というものもあります。安価なものから高価なものまで

あり、値段で機能が違います。ただ、あくまで環境騒音を小さくする機械なので、沢山の人の声の中から必要な声だけを拾うことはできません。

前回ご紹介した、絵本「子どもの気持ちを知る絵本③発達凸凹なボクの世界」の内容は、お話のみではなく、感覚過敏の説明やさまざまな対応の方法が掲載されています。

「慣れさせる」でも「がまんさせる」でも「がんばらせる」でも「くり返させる」でもない、その子の「脳の状態」に見合った「適切な感覚情報」を提供していくことが大切です。

自分が何に困っているのかさえ、ことばにすることが難しい子どもたち、だからこそ周囲の大人が注意深く見守り、気づいてあげることが必要ですし、集団参加をしている場合は、合理的配慮を求め、過ごしやすい環境を整えていくことが大切です。

お勧め本

このイヤな感覚どうしたらいいの？
販売元 ㈱フロム・ア・ヴィレッジ

